



中村俊定文庫  
文庫 18  
694







あきまをいふはきつは下ふは  
よこや山嶺今繁研

巻

先子と物下総下野り柳の柳くもきを  
筆の楯もく句條つの上杖を蕉句送  
て部集か御侍の語を書入るゝと此集は  
権のりん今もえ集けりふたこのの詩は  
よこや山嶺今繁研

句三三句もわく一かこもわがをわたり  
よこや山嶺今繁研  
よこや山嶺今繁研をるゝとこの代書  
直剛柔の風俗をくく徹底しつ而して  
句意を考授す一いふ可き事なりと今  
んて合点ゆるもの也同くよこや山嶺今繁  
研古めし

先回

よこや山嶺今繁研

け句いりや

菅

菴楚 カハラケサ  
イラハクサ 一名當道 和名ヲハコノサ

清原のけひを西よりひ祇園町を東より  
系外ハ少く細くもむしり細の縁より  
けひのけふたふりてふりて鬼  
灯のふりてまもぬりて西の先のとて  
けひとけふたふりてふりて

又同

腋のよもれかやふ木の花

け句腋の文字もけひのけひ

菅

腋のけひの要領かしてハ腋の文字も  
わくけひ十四経とえのく腋の文字も二の腋也  
キ角五のけひの腋の文字もあつて  
かして腋、脛散を言へけひの心曲又これ  
あつてけひのこも考味けひ

同 濱國寺にけひのけひをけひらねて

あゝとてやせふゆり歌ハ嵯峨  
けふいゝ

著

面上有西湖と袁中郎 中郎ハ明朝の文人

多行はく西乃華子西湖の佳景を  
さるるゆてあゝとてやせふゆり歌のうづも  
嵯峨あゝとてゆ法の化とてさるる  
及乃後中へ

同

けふふ花えぬ人やあゝとて

著

王維山水寸馬を人あゝとて西法を一寸の  
馬をくはゆめの人を人目鼻かを山波  
あゝとてゆ法の化とてさるる  
おゝ

同

名所の面起すやけふ  
著



鶴の中ふらふらとてあつり小條結を細也  
まきあまのまをさる人賞味し

うらつとて小田原鞆おりのたき松葉と云

同

又七ふあまのたのかははら

け又七いふれい

茶

牛のふあまのたのかははら

角つらもあまのたのかははら

蒸法和為

け右奇とて又七いふれい

こまのたのゆきとてあまのたのかははら

おりのたの看板ふ又七いふれい

同

傘柄の月ふらとてあまのたのかははら

茶

源氏流の表

秋のあまのたの看板ふ又七いふれい





青影月と雲と雲の千派あるを言ひし  
新月や雲のくもりのしほし  
と雲の白く新月のくもりのしほし

同

納名よ何る吹くねとくもの月

著

急歸と津納名

君の住用を替る又急を何よふ何吹くねと  
名よけん小田原町へ人を見せしむる

くもの月のまほひ老きし

同

名月や休も定ふけしむる

著

いととく角の雲ふらふと一雙の月なり

月ややはくく雲ぬ山かた

塔江町具窓子所持ありし今ハ不

名月結句ハ月のぬくふ樹をまをみし  
かる雀の影は清きよき又明星のはな

思入名とくつれぬおの極のきつととて  
四合点すつる

同

羨うとくつれぬおの極のきつととて

善

け時宗矢の和摩の戯場と

祐海云

ふとわくはもそくことや中籠申のきつととて  
いさよめと急難とすつれぬおの極のきつととて

時宗と和言の行とくつれぬおの極のきつととて  
走月の色とくつれぬおの極のきつととて  
深羅と双剣のきつととて

同 維摩澄

山の澄ハ大無くくつれぬおの極のきつととて

善

維摩詰毘耶離城中ノ長老夫悟の優婆塞  
号淨名居士釋尊同時ノ人  
床子維廣く月とくつれぬおの極のきつととて

大衆く則維たを床の海と一とを

同 本かくおてのこ

鳥帽子をいふ所へ 是る人まきまの  
名

人まねと大内山のやうなうら

本かくおてのこ 月とらんうら

兵庫の松政

いふ大内附の友おねと山まのまううねんふ  
名月一といふ所へ 是る人まきまの福くを

柱一をまきまの松云よん申也

是る人まきまの松云よん申也

志わはむらうを世とらんうら

けしきよくて二位の官小孫のまきまの  
名まきまの也

同 本かくおてのこ

是る人まきまの松云よん申也

けしきよくて二位の官小孫のまきまの

名

中吟の傍に經文は書かふ菩薩くま  
とまの善も薩も神冠のササくしてを  
是の善も房も神冠の文を傍に對座  
及び並らぬもあそ

同 中の郷と

幸清、善の傍くまや善和

善

か石中のつよ住り、幸野清は、  
くらぬ人くまの傍くま云、  
善のまある

松はくまの傍くまのすわら  
松と懐古也

同

松の善、社文のまあるの  
善、くまのまある

善

字鏡、於保地不久利  
和名、鏡、於保知、不久里、  
蝶蛸、螳螂の子也  
花葉、なま、くま、くま、  
善、和、り

寂しと一白く古くまじりたるを  
少くわくはるも名人上の一作中華と  
杖桑も自然とまじり情けひのき  
又此篇の句ふ

とふしとの小柳乃さるる志あるが

け句清六の陀法師よさるる柳の志あるが  
とせし終焉可なりとらり柳の志あるが  
素より玉連環の粉骨の人柳の姿あるが  
さるる境の可なりとらり白中ふせやけり

るのくとあひし文

莊子外篇至樂

支離叔與滑介叔觀於宜伯之丘崑崙  
之虛黃亭之所休俄而柳生其左肘  
其意蹶々然トノ惡之下略

林希逸曰柳 瘍カフロカサ今人謂生

癰也

さられと癰とらるるものかまふ合そのわき  
白中ふせやけり此意味源一はより出







北奥好色同しとれ今のはる癖なり王御  
馬のくまはり社頼は左侍の癖学歩は并の  
癖か辰のゆしつてふくも吉田の法沙ハ  
はきくの癖し

奈良一乘院法門主の善法和尙の御書  
良無の癖のゆしつてふくも吉田の法沙ハ  
西遊

各人の癖のゆしつてふくも吉田の法沙ハ  
西遊

善法和尙

人々をもつてふくも吉田の法沙ハ  
良無の癖のゆしつてふくも吉田の法沙ハ  
西遊

潤子の芝をわきまはすはたしめあはせしめ  
つるたし一方の器あはせ芝草の室をたしめ  
又若生のうしろも晋言かきふ隠儀とてけはしめ  
院より形貌しそ故人の位をけしむるがしめ  
縁飾をさつとも縁道の接ししかくはしめ  
河説し難非便儀とてしめしめしめ  
草鞋料を換るがしめしめしめしめ  
りふしし相今違ふしめしめしめしめ  
二十五禁のしめしめ又席のしめしめしめしめ

山本九下なる後西武貞徳翁のち才十首の  
後奇かきしめしめ  
連袂の席も扇の安ふ小縁を色しめしめ  
吉のしめしめしめしめしめしめ

一 千時寛永二年十一月五日山本西武主しめしめ  
活物め清寺本文坊よお力を松永貞徳翁の  
初め俳諧文意とて百負は尾果連流十人頃  
庄次第相勉も俳諧よ文意とて初め  
けは貞徳翁古きふ効て又老の武法定しめしめ

くつゝ又家室の煩悩を断つて修業すべし  
徳高きより貞室尊く先生道徳高きより好まざる  
一 去垢と云ひ執業の大小を見たり一 去垢と云  
執業の深也執業の浅也の目高ければ先づ依  
て去垢懐中より杖と嗜む持てしもの行く故を  
一 今合と標白願の違ひを見たり心の  
寸時も神妙の心けはけり可蘊ゆ之古式  
執業代合より一 今合の席柄柄を  
うづりて又合と標白願の違ひを見たり心の

あついで席柄柄を  
とまぬしと云ひて不可用ゆ  
以て去垢と云ひて先づ去垢と云ひて  
又去垢と云ひて先づ去垢と云ひて  
このもろもろんえん句柄柄を  
執業の心けりて心けりて心けりて  
と云ひて心けりて心けりて

一 席小臨れりて句柄柄を  
中時禱りて心けりて心けりて





白切を四す原一様年もそれ心めてうきた  
一して侍中白練中何る原一は世に縄張ら  
きてふ糸結と白とち切の原心あな何るは  
一糸一のふ縁と情一

一探頭茶白の燈何くも判着の老儂の歌も  
一とわつ時席中又合の傍うわは鳥歌の  
題也すたうは流りてうまのうくさつね  
とておのり花あはひいす人必おちり  
翁ハ杉風、耳のうきと歌て生涯流年の

句一のうはとく歌つらひをけ通のま  
おら又親とま一時もくむつ一まは  
そつらうももはうた題とてう結は後  
おと狂一と方一もあつ一まは歌と一  
たう一は歌也一一人ふま歌とすあの方  
對一まはと歌の被褥紙のうら扇子のら  
おとくま一と換一一金多うひるるは心  
そく思とまう一との句葉何は介と  
とてと後被褥へ徳一初り歌の被褥へ

おたうとひ

一 系紙のひびきの歌徳やうらう

系紙の方より角より句系がきよきも葉一  
部一紙より徳おす一席とのとまき者  
歌子席葉の神徳一もまきよと一ひびき  
あゝぬゝ業一ていさよふ友

一 巻の尾のうらう徳との中幸不幸うらう  
吟とありうらう徳一て徳との時と右式の  
紙をとらぬと

發句二遍句ひは奉句二遍うら 仰傳らう

一 名所の書 まにまにをくまの  
あまのまにまに

仰傳らう

名席とのひびき一紙の准て助傳はし

同き徳は一人あひつねを思ひわ

あまのまにまにの井と目わ

巻

山本西武樞と云書と編野に親を噴紙を  
編じ徳の二通で改書と紙と削り余と紙を

うり去娘に—合志芭蕉の詩と云われよらるる  
又瑞山の井—山村雪吟先生の著述あり  
芭蕉翁の仰おわて句論の先生とてを熟  
読して得るもの不審帛とて可なり  
とす所の事—そのことて空牙齧書と云ふ所也

吼雪同

起法博合のり合りの松とて知れりト

予の此序よらるる

名

根蠟子以下ハ詩作よめくハは存知のり  
詩のニ義則之

伊初歌

聞道黄花成 頻年不解兵  
可憐国裏月 偏照漢家營  
是初ハ起く頻年ハ清く国裏月ハ詩也思  
管谷也

初聞道黄花成

吾又ハ黄花ハ成年ハしてわらわらとて苦むハ



地名ありて軍の卒あるを二句發るる是起し  
二頻年不解兵

ありてはく軍ありてはくはく御ふ是の  
あるは軍のゆとあり補ふ由は是

三 可憐 国裏月

淋 三 国 裏 月 入 月 あり ち 句 二 軍 の ゆ  
を 印 二 句 二 句 二 句 二 句 二 句 二 句 二 句  
ありてはくはくはくはくはくはくはくはくはく  
ありてはくはくはくはくはくはくはくはくはく

偏 哭 漢 家 營

月の光はけりてはくはくはくはくはくはくはくはくはく  
陣營とありてはくはくはくはくはくはくはくはくはく  
ありてはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく  
ありてはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

御 塔

塔の羽もかいつくはくはくはくはくはくはくはくはくはく  
ありてはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく  
ありてはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく  
ありてはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

初の字跡入十月の宗徳そのくすをまめや  
一句發するを起し

眼印と吹風の木の葉を静く紅

印と吹風ど日の光忽として木の葉の濡るも

見るとわし一行枝の葉もも眩赤とて發句の

糸とすけはくもはくも

才三股川の流るる流る川越と

羈旅の曉風も静くいさやと三む若くつれの

川越ゆく飛商ひの別れはつらひ旅の一字の

白眼くすれと句曲を詠つるも園葉のなほ

地のひやうくも是れと人合の山をむむふ

たうとやうふ

晋子曰發句幹のまゝ一樹枝のまゝ一才と

地のまゝ一喜雨のまゝ一附合葉のまゝふ

かりはくも教く葉のまゝくのもちまはるすし

詩中の画画中の詩をくもぬ

根蠟同

は樂多納はなふらふりふりや

著

随分の形も中沙情の生る

又同

娥日姻之縁着志新宅牌追名可

一乃方学行る居る中

勿偏之志こそ師傳のく宛言古おきん

とのおれえつ和の中交よ心月おかけ得

可也

起清之事

亦小僧沿枕心こそ交心門才

故美在飲つお他名も好し活古皆様人

中ら愛い又も他師を和る中弁有る

趣に遠程を和弁三神の影沙野永弁道

冥加有る補考之仍記清文の件

正保二年

酉七月四日

小村久助

静享刻

鍵屋丸在重門棟

追得し之結令純心と云けり及し傳文の示  
す所人の許容許の因根人として云ふに  
お背し和奇之神と云はし討永弁道實加  
方ら云ふと云はし

正保二年

七月二日

川村久助

静享共刻

鍵屋左近門様

惟沼奥後令傳文云々

- 一四道句賦之事
- 一五筒甚矣之事
- 一十一ヶ條鳥之事

右之條奥後年月令懇中云々けり及しお  
以中加しお弟と云ふ下字甚ら減名を存し  
は法及しお背し云々

しきと云ふおし一丁目かきし  
のゆゑ今も及しうねの門よ今もく  
多交りてすらふやと云ふおらひも

右のこくおれと道と大切といふゆゑ傳せ  
はく一とるゆゑも格多し一事もさへも眼の曇  
かへしあつてゆく自享子の娘芭蕉高正月を  
起し今却郡山澤を以てする門人今尚書  
吏官たり莫きゆゑと續ききこさるる馬坊  
こゝもその流形を所りかたさゆゑも  
ゆゑり旅中の玉とて人寄りおむせ  
同 遊園表左のく注人とて也

安永正享新發して自室と云自徳翁  
義徳二年十月十四歳して卒す  
追善の會なる例宗畔亭弁白宗畔服  
西武才と光切とく人徳四句自正享下略  
小村久助ハ後季吟先也

吼雪同

弁白と又字丑又字とく流する句上又字  
雪のこけりあふちりけり  
雪

まゝにその方面の字用と云ふ文字ありては  
あつてはらうと

法橋胡居河火之理と云題を其金の  
意中承せられし方面のうへは

や一終るる字の傍らうと云

く一終るる字の傍らうと云

と一終るるの五文字ありては一平道入

のゆらうと云と續と云と云の終る

ゆらうと云と

名月や露と終るるとの終る

と云五漢徳と云

と云

け如法是かたしあつてはらうと云のれもあつては  
あつてはらうと云のれもあつてはらうと云  
と云てはらうと云は千と云と云と云と云  
二千里の外故人の心先と云と云と云  
も今もと云と云と云と云と云と云  
又又と云と云と云と云と云と云

物一舟入あり國志しとまゝの事合せて  
收ぬ

名月や露を結して國志し

秀作ふかひゆる一白は結ゆを國志し  
一の懐く是師史登の格子の花房よりす  
とさゆの危下のかんこもしつゝの道も類  
篤威も程のしすゝみひらぬ人ゑん  
下野し柳のしき下総の國上意門古學も  
稱しけらふ久くはる人地郷の志道し

いづれも合せしむく五七番とて平徳直に  
はる山の野の事して

すすし白も雪にしらぬ初らぬ

名月や露を結して國志し  
秀作ふかひゆる一白は結ゆを國志し  
一の懐く是師史登の格子の花房よりす  
とさゆの危下のかんこもしつゝの道も類  
篤威も程のしすゝみひらぬ人ゑん  
下野し柳のしき下総の國上意門古學も  
稱しけらふ久くはる人地郷の志道し  
いづれも合せしむく五七番とて平徳直に  
はる山の野の事して







あゝの神樂はほろけしめ  
あゝの神樂はほろけしめ

あゝの神樂はほろけしめ

あゝの神樂はほろけしめ

あゝの神樂はほろけしめ

あゝの神樂はほろけしめ

あゝの神樂はほろけしめ

あゝの神樂はほろけしめ

あゝの神樂はほろけしめ

あゝの神樂はほろけしめ  
あゝの神樂はほろけしめ  
あゝの神樂はほろけしめ  
あゝの神樂はほろけしめ

あゝの神樂はほろけしめ

あゝ

あゝの神樂はほろけしめ

あゝの神樂はほろけしめ

あゝの神樂はほろけしめ

沈水より火をすけはのそまふ  
多子居るはし

川跡す高浦のその深き所と

さう言ふ子へんもさう言ふ子はさう言ふ也  
一字まじはるあてはるの一字を如くし

川跡す行やめは流るの海も

忽筆をてはるをさう言ふはさう言ふ一字  
あはる百練千派のさう言ふ

又同言ふは何と疑ひまてはる

さう言ふ又と疑ひまてはる  
さう言ふ

善 徳翁

伊勢津法樂 田舎

何のめは花もさう言ふは  
何のめはさう言ふは  
さう言ふはさう言ふは

西上人

け祭は何とさう言ふはさう言ふは

是すの外をいひてさすとしてこくと後に入念す  
くさふねどもふ句の外はひてきくさく

寒松格 芙蓉格 晏交

轉名 奇趣 観丹

是又は十一格行り悉きすふら存難ひて七  
る句をさすさる句中二期一夕のともは  
あはれも深き無一切らさく書るしりも  
月小かくし一祀着二十五條よきと確よ

喻もあし業さく心元よく是の助せん  
り多の暮さきあしかりあく懸空の偶中  
心は同く慚愧あし

根燈同

祭句の題られ訪くの筆は同朋

子あしけ論あしけいしや

若

祀着を母もはらりし一先別品は母を  
きくはらりしはらりしは母を

月いそ秋草も寒燠燥濕は夢の如くも丹  
何れもひ海たるもの見えなきもさりとれは  
とくたきとてし

雷電の淫小菅丞相発憤

伸権ふかきりし 柘榴とてわく 嗟碎き書人  
吹のくそ火燄とてわくしとけけ防の盛りの  
修成むわくもの影とてわく火燄とてわく  
柘榴とてわく又海とてわく 今もさくさく  
つとて吹のく火燄とてわく 人はいかに

おひのよし 一先師風雪初つの人をたか  
まーおし 侍ふ氷花はつとけけし海教を  
せしき 蕉の庭ぬらぬ人やとてし  
え福とてし 聖集のころ

とてえまむ 紙燭をたたく庭か

ほくしと 繪をさる秋の箱か

寛政八と百の年とけけしとてわく  
庭ぬらぬとてわく 一とてわく 秋  
けしとてわく 自筆のころ

あは師情とてしるべし前情おれし心合長きこと  
能かふけしとら厭倦せし藝妓の切つもの風流  
何とてつてさき勢とてしるべし師おくはつとて  
惑と解んかひてそのく師を物とせし諾  
りおれしつとてしるべし一事も結す心  
がまはし事つたえとの流書もあれを籍ふ  
正しくつとてしるべし心つたえしつとて  
つとての惑と解するは呼頭持後の流法  
馬光二に年いふ柳とてしるべしつたえしつとて

身順の習はるるのまはし流書もあれを籍ふ  
法は席のつとてしるべし事つたえとの流書もあれを籍ふ  
心つたえしつとてしるべし心つたえしつとて  
一郷ふしつとてしるべし心つたえしつとて

物とてしるべし心つたえしつとてしるべし心つたえしつとて  
心つたえしつとてしるべし心つたえしつとてしるべし心つたえしつとて  
心つたえしつとてしるべし心つたえしつとてしるべし心つたえしつとて  
心つたえしつとてしるべし心つたえしつとてしるべし心つたえしつとて  
心つたえしつとてしるべし心つたえしつとてしるべし心つたえしつとて  
心つたえしつとてしるべし心つたえしつとてしるべし心つたえしつとて  
心つたえしつとてしるべし心つたえしつとてしるべし心つたえしつとて  
心つたえしつとてしるべし心つたえしつとてしるべし心つたえしつとて

逝矣年不我延嗚呼充矣寸寸原寸寸の  
教も何れと必見少くも油以有るべし

藝師姑嘗多風月帖の撰  
わくや如く一甲あり乃證所を  
夫一を 新中 子埋免 何ん  
一夕姑素 活かなし 見ん  
る 故本 之を あり 娘 孫  
物 之 あり 一 其 申 の 絶  
と 之 を 誣 謗 之 故 無 事

菊子乃志の字子めり世産の  
漢尾尔雪行一響のしを  
後来子求るるにむかひ

寛政八年陽毎月







